

JASIS

NEWS

No. 33

2005/3/22

日本インテリア学会会報

■2004年を顧みて

会長 高橋鷹志（日本大学・早稲田大学）

昨年の豪雨・台風・地震は、環境が一続きであることを改めて教えてくれました。さらには小学校の体育館など公の空間が私の集住の場になることや、インテリアが個々の建物の内側だけに存在するのではなく、通常エクステリアと呼ばれる町や自然も、人々の行動にとってはインテリアの役割をもっていることを実感させてくれたのです。こうした人間の行動環境としてのインテリアとは何かを議論することから、当学会の進路を見極めて行きたいと感じています。以下、主だった活動について私見を披露します。

1) AIDIA3

第3回AIDIA東京大会の開催は、今年度の最も重要な行事でした。過去2回の大会に参加された先生方の帰国談を伺っても、大会の全容を把握することは難しかったのですが、アジアのインテリアの学・術・技の状況を直接拝聴するまたとない機会となりました。加藤力AIDIA実行委員長をはじめとする皆様の献身的な努力によって開催に至ったこと、また大会後のまとめや今後の活動を計画していただいてに深甚なる敬意を表します。なお具体的内容・成果などについては同氏の報告に譲ります。

2) 第16回大会

周知のとおりAIDIA大会の翌日に当学会第16回大会が開催されました。これを取り仕切ってくださった文化女子大学の小原誠、沢田知子両先生をはじめとする諸先生、学生の方々に感謝いたします。この報告も沢田知子先生の手稿に譲ります。私がどこかでお話したかと思いますが、インテリア学・デザインの方角について次のような

考えを持っており、今回のシンポジウムのテーマもその一つの試みでした。

近年インテリアへの一般的関心の高まりがあるのですが、それは採算性・効率性を求める饒舌なデザインの一一方で、「私」の先端的快適性追求の結果としての国際様式追求を思わせる住空間デザインなど、一見洗練されたかにみえる表層表現が流行しています。しかし、その空間での行動規範は置き去りにされ、身勝手な振舞いが横行しているように思えてなりません。環境・行動の一体的考察こそ本学会の考察観点ではないでしょうか。この点について会員諸氏のご意見を下されば幸いです。

この大会行事にAIDIA大会のアジアからの参加者がなかったこと、逆にAIDIA大会へのインテリア学会員の参加者が極めて少なかったことが心残りです。AIDIA主催国として二年間担当するに当たって、会員諸氏の関心の高まり期待するや大です。

3) 学会運営

従来からあった総務委員会を拡充し、定期的（隔月）に開催し、学会運営に関する議論の場とすることを認めていただき、昨年12月に第1回委員会を開きました。運営、活動の活性化に繋がることを期待しています。詳細は上野義雪委員長の報告を御覧下さい。また長らく事務局をお願いしていた藤城幹夫氏に替って、東京大学建築学科、西出和彦氏に新事務局を担当していただくことに致しました。自宅に事務局を置いて御苦勞いただいた藤城幹夫氏には会員一同に成り代って感謝の意を表したいと存じます。

最後になりましたが、昨年は私の体調不良の故に学会の役員、会員の皆様方に大変御迷惑をおかけしましたことを伏してお詫び申し上げます。小原二郎名誉会長より引き継いで何もしないうちにこのような事態を迎えたこと、私の不徳のなす故と深く反省しております。

■第3回 AIDIA シンポジウムを終えて

AIDIA 大会実行委員長 加藤力 (宝塚造形大学)

韓国、中国に引き続き、かねてより懸案でありましたアジアインテリア学会の第3回国際シンポジウムが、10月15日東京ビッグサイトで開催、修了いたしました、大会実行委員長として、関係なされた方々に次のよう心より御礼を申し上げる次第です。

何よりもまず、このようなかたちで日本において開催、運営できたことにつきましては、日本インテリア学会、特に関東支部の皆様をはじめとした実行委員の方々の一年間にわたる偉骨のご努力、周到な計画と実行のたまものと、胸の熱くなる想いで感謝、御礼申し上げます。

また、高橋会長はじめ、理事、評議員、幾人かの会員の皆様には、開催運営に直接、間接的にご支援、ご協力、ご参加いただきました。とりわけ予算がなくては到底開催などかなわぬところ、多くの準備金・ご寄付をたまわり、どうか開催にこぎ着けたというのが本当のところでは、このことに対しましても、全身で感謝し、厚くあつく御礼申し上げます。

さらに、インテリア産業協会を始めとする幾つかの関係団体あるいは企業からも本シンポジウム開催に対しご寄付をたまわりました。このこと会員の皆様もご承知いただき、ご協力いただいた団体・企業に対しインテリア学会を代表し実行委員長から心から御礼を申し上げます。

しかしながら、反省点や見込み違いあるいは今後の課題も幾つか残りました。また、国際交流上どうしても乗り越えられない障壁もありました。これらは今後国際会議を続けて開催していく上での克服すべきことと、心の内に刻んでおります。今後2年間、日本がAIDIA主催国となります。すなわちJASIS高橋会長がAIDIA会長となるわけです。おそらく岡島副会長を中心に運営がなされていくとおもいます。どうかインテリア学会員の皆様には、一層のご理解、ご意義を感じいただき、さらなるご協力をお願い申し上げます。

尚、会計上多少額の赤字がでましたが、これらは作品集、論文集の販売により、解消されますこと付け加えておきます。

■インテリア学会第16回大会の報告

□大会概要

第16回大会実行委員長 沢田知子 (文化女子大学)

第16回のインテリア学会大会を本学で開催し、滞りなく終了することができ、ほっといたしております。

本年は、例年の大会とは異なり、第3回AIDIA開催と繋がった企画となったため、本学では大会当日の発表を中心

に、1日のスケジュールでお引き受けいたしました。

実行面では、本学における授業との関係から、前日(金曜日)の夜に設営を行い、当日(土曜日)の夜には通常の教室へとかたづけるというあわただしいスケジュールでしたが、特に大きな支障もなく遂行することができました。

当日は、大会発表として52件、講演会にも多数の方々にご参加いただき、盛況であったと思います。なによりも、新会長となられた高橋鷹志先生にご出席いただいた講演会で、人間とともにある「インテリア」について重要な問題提起をしていただいた事が心に残っております。短い時間ながらも和やかな会場の雰囲気の中に、今後の学会としての課題を共有できた一時でした。当日の夕方でも、懇親会の場を設けていれば、そんな思いをもっと共有できたように思い、少し残念です。

いずれにしろ、発表や講演会での貴重なディスカッションをもとに、さらに魅力あるインテリア学がつくられるよう、今後の活動に期待したいと思っています。

また、本年の大会では都市部の開催校としての利点を生かし、社会連携を図る意味で、10周年を迎えたりビングセンターオゾン、インテリアコーディネーター・インテリアプランナー・マンションリフォームマネジャーの資格関連団体の方々にも、会場での情報提供のご支援をいただきました。

インテリア学会は今後、学術的な蓄積と広がりの中で魅力ある活動を推進するとともに、関連企業や団体とのネットワークも強化し、活力ある学会として前進していくかねばならないと思います。

第16回大会はそのためのひとつの布石となったと思っており、ご参加ご協力をいただいた皆様に、改めてお礼申し上げます。



▲パネルセッション風景



▲卒業作品展風景

□大会シンポジウム概要：インテリア空間と人間の行動・作法 一人間の身体・動作・立ち居振る舞い・座・行動規範をめぐってー

高橋正樹（文化女子大学）

1) 沢田知子先生の趣旨説明

今回は「インテリア空間と人間の行動・作法」というテーマで、あらためて日本人にとってのインテリア空間のあり方について議論していただきたいと思います。

2) 矢田部英正先生（武蔵野身体研究所）

日本は必要最小限の空間の考え方として「座」が基本にあると思っています。座るだけでそこに空間が発生します。人間の存在と空間とは切り離せない関係にあります。人間の身体から空間をみるのが大切です。つまり座り方によってどのように空間が発生するかということです。座り方や姿勢という問題は空間の発生だけではなく、ものごとの認知や社会の形成まで広がるテーマだと思っています。

身体と道具の関係について話をします。今のドアの取手は、ガチっとしっかり握ってまわすようになっていますがそれだとよく壊れます。昔の取手は決してにぎり具合がよくはないです。でもこれだと壊れません。今の道具はあまり使う側が考えないで使えるようになっています。あまり考えないのでガチっと握ってしまう。これがよくないと思っています。ドアの場合は開け閉めの作法というのがあります。それは身体と道具の繊細な関係です。急須なども余計な力が入らないようにできています。また、茶道ではフォーマルになればなるほど、緊張して失敗しやすい茶の道具を使用します。つまりそういう状態でいかに平静でいられるか、というのが日本の格式になっているのです。

工業化が進み大量生産大量消費の時代になりました。このような時代ではわかりやすく簡単さが求められます。敷居がどんどん低くなっているのです。しかし一般化や普遍化が進む一方で長い目で人間が道具を使いこなすという視点も必要なのではないかと思っています。楽器などで言えばプロは素人では使いこなせないものをこなしています。家具なども10年100年と使い続けることによって身体がこなれていきます。もっと長い時間の中で身体から道具を見る視点が大切だと思っています。

3) 内田青蔵先生（文化女子大学）

わが国の住宅の近代化の概念図を示すと一つは床座と椅子座の軸があり、もう一つは真壁造と大壁造の軸があります。この2軸上に伝統的和風住宅と西洋の洋館が位置づけられます。この両者の洋風化和風化という現象は、この図の中でより中心の方へひっぱられていく現象だと説明できます。昭和初期には伝統をすべて捨てるのではなくて混在する状態をつくり出しましたが、ここで日本の住宅の新しい形式が生まれました。戦前は床の高さが非常に重要な役割を担うようになり、床座と椅子座の高さのレベルをそろえることで両者が共存をしたのです。

現代はバリアフリー時代ですが、それは床のレベル差を取り払ってしまったということです。このことはこれまでの住宅のよさのある部分が消え去ってしまったのではないかと思います。現在は明治からの危機の第二波にあると思っています。

4) 高橋鷹志先生（日本インテリア学会会長）

人間対人間のふるまいがどうなるのか、環境行動研究（EBS）では行動場面（Behavior Setting）という言葉が主要概念になっています。これは他人と「居合わせる」ことでお互いが影響を受けているということも意味しています。TPOとは時・場所・場合のことを言いますが、一方で人間と人間の関係によってどう行動が変わるかということも言っています。「座る」ということも時と場の関係によっていろいろです。それを我々はどうやって教わったらいいのでしょうか。私は今まで一度も座り方について教えてもらったことはありません。また少し考えれば「本を読む」といってもさまざまな読み方のあることがわかります。つまり本を読むという行動場面にもいろいろあるのです。さまざまな場面で人は知らず知らずのうちにいろいろなものを取捨選択しているのです。これまでのインテリア計画は寝室なら寝る場所と杓子定規に考えてきましたが、そういうことではないのでしょうか。

インテリアにとって大切なのは、物理的な空間と人間の行動をどのようにうまく対応していくのか、ということです。そこでインテリア学会はどういう役割を担っていけるか考えないといけません。インテリア学会の行動計画をどのように考えればよいのでしょうか。

最近では、私は仏教の「修行する」というのはどういうことかについて考えています。ボランティアや教育についても思いをめぐらせています。また和のもっているよさをどう継承していけばよいのでしょうか。匠のよさをどう伝えればよいのでしょうか。身体に接している素材として畳にかわるインテリアエレメントを考えるのもおもしろいです。物理的な室内にある人間のふるまいも同時に。

5) 沢田知子先生（文化女子大学）

茶の空間と作法と題して、姿勢、起居、室礼、畳、座、場面、時、空間についてお話をしたいと思います。床の上での姿勢として茶室空間における着座の姿勢があります。床で支えられる身体は、上半身が自由に使えます。亭主が特にそうです。亭主は正座をする場合でも片方の足をもう片方の足の甲にのせ、動きやすくしています。重心が高い位置となることでリラックスしてこまかに動けるのです。着座のひとつである正座は小さな空間でも互いを許しあえる空間を生み出します。一方、広間における着座には茶室における立礼があります。和室の空間に家具をおいて茶を行う形式です。明治4年くらいにはじまりました。これは内田先生の住宅の洋風化のお話と一致します。

内的で小さな空間の豊かさや特質を明らかにすることはインテリア学にとって大切です。これは日本独自

のもてなしにも通じます。これからはインテリア空間における豊かな内部空間と行動様式を創造することが必要と感じています。



▲シンポジウム風景

□収支報告

1) 収入の部

大会運営費：¥450,000：インテリア学会本部より
学会員より：¥271,000：大会参加、発表登録、梗概集
収入合計：¥721,000

2) 収支の部

印刷・発送代：¥98,524：事前案内印刷費、発送費（1回目）*1
卒業研究展会場設営費：¥81,585：展示備品借用・設営・撤去
会場設営（消耗品）：¥65,055：掲示物作成、プロジェクター
ランプ代
学生アルバイト代：¥78,000：会場設営、当日案内、司会補助、受付
休憩所：¥1,522：お茶、紙コップ
記念講演謝礼：¥50,000：¥25,000×2名分
会議費：¥63,439：実行委員会打合せ
送料・通信費：¥11,875：印刷所への資料送付等
大会参加費、発表登録：¥271,000：学会本部へ
支出合計：¥721,000

*1 大会案内の2回目は、学会本部からの案内物と同送したため支出なし。

□第16回大会実行委員

大会委員長 沢田 知子
委 員 小原 誠
木村 戦太郎
井上 祐一
大津 由美子
長山 洋子
浅沼 由紀
渡辺 秀俊
高橋 正樹
谷口 久美子
丸茂 みゆき
松田 純子
沼尻 七子
松本 美穂子
曾根 里子
見城 美子
若宮 直行

■第16回大会研究発表題目一覧

A. 論文部門

□歴史・意匠 座長：小原誠（文化女子大学）

- 001 江戸城本丸御殿・西の丸御殿中奥休息の間障壁画《古河松原図》に関する一考察 武家殿館における名所絵障壁画の研究（3）；平井良直（相模女子大学）
- 002 帝国ホテルのステンドグラスの意匠と製作に関する考察；西尾雅敏（博物館明治村）、金田美世
- 003 昭和10年代の暮らしにみる家電と洋家具 ある家族の事例から2；長山洋子（文化女子大学）、前島諒子、林知子

□環境 座長：高橋正樹（文化女子大学）

- 004 室内空気質測定用ポータブル VOC 分析装置について；中山正樹（新コスモス電機株）、久世恭、神田奎千
- 005 大型チャンバーを利用した家具のホルムアルデヒド放散試験；松浦勝翼（職業能力開発総合大学校東京校）、加島守、小川和彦、角野政弥、箭内慎吾、門倉和夫、松村年郎
- 006 木造住宅における防音サッシの遮音性能経年変化；清水実（日本工業大）、喜田理子

□人間工学（1） 座長：渡辺秀俊（文化女子大学）

- 007 ビル用玄関ドアの開閉方式に関する一提案；小原誠（文化女子大学）
- 008 キッチン用加熱機器の操作性に関する人間工学的評価 その2 新型加熱機器の評価；赤塚史章（千葉工業大学大学院）、上野義雪
- 009 キッチンの使用性を考慮したワゴン収納に関する研究；宮本鈴実（千葉工業大学大学院）、上野義雪
- 010 寝具の三層構造の役割とその応用に関する研究；上野義雪（千葉工業大学）、佐藤昌弘、塚越理恵、上野弘義
- 011 地域高齢者コミュニティ施設の公的空間における身体支持具のあり方に関する研究；趙鏞吉（千葉大学大学院）清水忠男、佐藤公信

□人間工学（2） 座長：直井英雄（東京理科大）

- 012 交流前後におけるロボットから受けるイメージロボットと人間との相互交流に関する試行実験（その1）；林田和人（早稲田大学）、遠田敦、佐野友紀、渡辺秀俊
- 013 ロボットのデザインと作業イメージの関係 ロボットと人間との相互交流に関する試行実験（その2）；佐野友紀（早稲田大学）、林田和人、遠田敦、渡辺秀俊
- 014 ロボットの交錯時における人間の回避行動特性ロボットと人間との相互交流に関する試行実験（その3）；遠田敦（早稲田大学）、佐野友紀、林田和人、

渡辺秀俊

- 015 ロボットと人間との対人距離に関する検討 ロボットと人間との相互交流に関する試行実験 (その4); 渡辺秀俊 (文化女子大学)、遠田敦、佐野友紀、林田和人

□計画 (1) 座長: 北浦かほる (帝塚山大学)

- 016 平面計画の質的評価に関する研究 (2) 契約実績における室内動線の回遊性に関する現状把握と考察; 横田哲 (パナホーム㈱)、石橋実
- 017 SOHO における仕事空間と生活空間の関係 SOHO 事業者及び家族の問題点; 白石光昭 (小山工業高等専門学校)
- 018 団らんの現状と団らん空間のあり方に関する調査研究; 正岡さち (島根大学)
- 019 コーポラティブ住宅事例のコンセプトに関するキーワードの分析 「経堂の杜」ほかの分析; 小川陽子 (広島工業大学) 水内佑紀、森保洋之
- 020 韓国大都市アパートのリモデリング事例分析; 申京珠 (韓国漢陽大学校)、張尚玉

□計画 (2) 座長: 浅沼由紀 (文化女子大学)

- 021 介護居住空間における基礎的考察 単身者のための介護居住空間に関する研究その1; 伊藤聖子 (広島工業大学)、平田圭子
- 022 事例における介護居住空間の考察 単身者のための介護居住空間に関する研究その2; 平田圭子 (広島工業大学)、伊藤聖子
- 023 介護保険による住宅改修をめぐる情報源に関する考察; 松房綾 (前橋工科大学)、古賀紀江
- 024 制作モデルの表象にみる子供のインテリア観について その2; 片山勢津子 (京都女子大学)
- 025 Family child care にみるアメリカ住宅の保育空間; 北浦かほる (帝塚山大学)

□計画 (3) 座長: 白石光昭 (小山工業高等専門学校)

- 026 創造性を育むための学習の時・空間設計 脳の働きに基づく学習システムのデザイン; 秋山京子 (㈱イトーキレブイオ中央研究所)、安藤四一
- 027 CAD/CAM による車椅子のデザイン研究 その2 プラスチックダンボールによる車椅子の研究事例 その1; 山口光 (東北芸術工科大学)
- 028 コンテナ型収納家具を用いたオフィス環境システムの提案; 屋比久祐盛 (琉球大学)、宮良保義
- 029 キューブボックス型収納家具の定義と分類; 米原悠介 (琉球大学)、岡島達雄
- 030 キューブボックス型収納家具の評価方法の検討; 仲程千賀子 (琉球大学)、米原悠介、岡島達雄

□色彩・照明 座長: 湯本長伯 (九州大学)

- 031 空間照明の相関色温度が色相弁別特性に与える影響; 片山一郎 (宮城工業高等専門学校)、青木務
- 032 照明による好ましさ評価への影響について 印象評価実験による心理的影響からの考察; 中島龍興

(中島龍興照明デザイン研究所)

- 033 VR を用いた色彩による空間イメージへの影響; 老田真美子 (元大阪産業大学)、ペリー史子
- 034 一般大学生における色彩に関する意識調査; 小野清美 (岡山大学)
- 035 街の景観と CI カラーのイメージ 現代若者が心地よく感じる配色、不快に感じる配色とその傾向; 中嶋健治 (東北芸術工科大学)、日原もとこ

□計画 (4) 座長: 平田圭子 (広島工業大学)

- 036 一対比較法によるイメージ印象評価; 宮下芳明 (北陸先端科学技術大学院大学)
- 037 空間の自己化とその表出に関する研究 その5 実態と言語との関係について; 松田奈緒子 (京都工芸繊維大学)、加藤力
- 038 住宅のインテリア空間の生態学的研究その1 空間の質に関する研究の枠組みと方法; 石橋実 (パナホーム㈱)、宮平繁昌、金岡千晶、加藤力
- 039 住宅のインテリア空間の生態学的研究その2 インテリア空間における質的因子の抽出; 宮平繁昌 (京都工芸繊維大学大学院)、金岡千晶、石橋実、加藤力
- 040 住宅のインテリア空間の生態学的研究その3 インテリア空間への質的因子の適用と評価; 金岡千晶 (宝塚造形芸術大学大学院)、石橋実、宮平繁昌、加藤力

□計画 (5) 座長: 上野義雪 (千葉工業大学)

- 041 ヴォリュームの異なる二空間を通り抜ける際の空間知覚に関する模型実験; 水澤秀輔 (東京理科大学大学院)、矢島規雄、直井英雄
- 042 VR を応用したインテリア構成要素の進行方向選択に対する影響; 上野山茉莉 (元大阪産業大学)、ペリー史子
- 043 インテリアのパターンコーディネートに関する考察 VII 3次元パターンの形容語句評価 (二軸マトリックス); 小宮容一 (芦屋大学)、井上徹
- 044 住空間における床面の色彩と容積感との関連性について その1 床面全体を単一色とした場合; 谷口久美子 (文化女子大学)、長山美樹
- 045 住空間における床面の色彩と容積感との関連性について その2 面積変化と色彩の組み合わせの影響; 長山美樹 (㈱リアルウッド)、谷口久美子

□教育 座長: 木村戦太郎 (文化女子大学)

- 046 インテリア製図における表現手法の現状; 岡本一紀 (東京理科大学)、奥田宗幸
- 047 建築、インテリア科のための家具製作課題の提案 合板家具ではない、無垢材を使用した家具製作法; 朝山隆 (武蔵野美術大学)
- 048 インテリア分野における CAD 資格・認定制度の開発について; 岡田悟 (共立女子短期大学)

B. パネル発表部門

□設計・デザイン 座長：見城美子（女子美術大学）

- 049 スペース・ディバイダー タペストリーによるスペース・ディバイダー；植松暉子（大阪産業大学）
- 050 収納・縁側・運動の機能をもつ和室空間；伊藤道子（MID）
- 051 コミュニケーションに配慮した打合せ家具・什器の開発 議論と共同作業に適したワークスペース；木村戦太郎（文化女子大学） 田村雅司
- 052 四ツ屋公園 project（提案） 川の記憶のデザイン II；今井裕夫（岐阜市立女子短期大学）、船曳悦子

■第16回大会研究発表講評

□歴史・意匠

001は江戸城本丸及び西の丸御殿休息の間に、19世紀半ばに障壁画として描かれた日光街道の古河の松並木に関する考察であり、以前の障壁画にえがかれたような画題と異なり、特に史的な名所とも思われぬ風景が選ばれたことについて考察し、東照宮参詣を代々の重要行事とする将軍家にとっての意味、平板な関東平野のなかで、筑波山を背景に、古河城主が17世紀より営々と造営されてきた松並木の偉観に、将軍らが並々ならない関心をもっていたことを、将軍家慶がご用絵師にスケッチさせていたことから推察されるとしている。これについて、司会より筑波山がスケッチより大きく描かれていることから、江戸市民に親しまれていた筑波山が望見されることが重要だったのではないかという意見が出された。

002は明治村に移築されたライトの帝国ホテルにおいて、多くの部位に角型の千鳥状の 패턴が多用されているなかで、ステンドグラスの正方形と二倍長の矩形の組み合わせで金箔入りガラスを千鳥状に嵌めたものがオリジナルで、一部にのみ適用されているのに対し、完成時近くには三列の正方形格子に、透明部と金箔ガラスを千鳥にはめ込んでいる pattern に変わっていることについて考察し、前者の pattern ではステンドグラスのT字形のケームがゆがみ見えることから、発表者はライトが方針を変更したものと推測したと述べた。これについてライトは光の演出にこだわったのではないかという意見に対して、発表者は、テラコッタでは複雑な千鳥状の pattern も容易に製作できるのに、一品製作のステンドグラスでは工期末でもあり断念せざるを得なかったのではと述べた。

003は継続研究で、大正末期の裕福な給与所得者である小林家の家庭において、当時としては贅沢品であった各種家電製品・電話、ピアノ、洋風家具を、準和風の家屋に導入した状況を、娘孝子の当時の家庭の記録をもとに洗い出したもので、特に家を改修せずにそのまま持ち込んでいることに、当時の中流家庭の生活の一端が伺えるとしている。これらの家電製品には電気レンジ、電気ストーブなど、大きな電流の必要な機器もあり、庶民住宅では5A 契約が一般的であった時代に、どのくらいのアン

ペア契約を行っていたかが知りたいものである。

（座長：小原 誠）

□環境

004は、専門技術に依存せず現場において短時間でVOC等の測定結果が得られる装置を開発することを目的とした研究である。従来までの一般的なVOC測定法である加熱脱着-GC/MS等は、専門のオペレータによる分析が必要であるため時間とコストがかかった。ここでは低濃度のVOCを測定するための検出部の素子として、超高感度半導体式センサーを開発した。装置本体は小型かつ軽量（9kg）であり、データ出力も自動的にパソコンに取り込まれ専用ソフトによって解析される。この装置を用いて実験室及びフィールドで測定した結果、両者はほぼ一致しその有効性が実証された。この新しい装置の開発により短時間かつ簡便にVOCを測定することが可能になった。

005は、家具に関する空気汚染物質の測定方法並びに指針値（ガイドライン）の規定づくりを想定した研究である。2003年7月に建築基準法が改正され建築材料の揮発性有機化合物に対する規制が強化された。一方、家具についての規制はなされていない。本研究では大型チャンバーを利用した家具のホルムアルデヒドの放散試験を行い、その結果に基づき大きな空間（講堂）に連結椅子を多数配備した場合の空気汚染物質を予測するための考え方を示した。結論としては、家具を搬入する部屋の容積と換気回数もしくは換気量が事前に把握できれば、概ね室内汚染濃度を予測することが可能であろうとのことであつた。今後、実際の現場での検証を行う予定とのことである。

006は、木造住宅における防音サッシの遮音性の経年変化について検討した研究である。2000年度に行った遮音性能の実測値と比較をすると、防音サッシにおいてはオクターブ帯域毎 TLq 平均値の差で8dB~11dBの低下、外周壁においては3dB~11dBの低下がみられた。初期の遮音性能を維持するためには、気密材の取替えや枠の変形の有無等の検査の実施が望まれる、と結論づけている。今回は3年経過後の状態を考察したが、今後も継続的に調査を進めるとのことである。

（座長：高橋正樹）

□人間工学（1）

007は、ホテルやビルのための安全な玄関ドアの開閉方式について考察したものである。風圧の影響を受けずに開閉できる開き戸形式として、①片寄せ折れ戸、②中心支持滑り出し戸、③四分点支持中折扉の3種類の提案がなされた。それぞれ、戸先の軌跡、扉の運動エネルギー、クローザーの所要トルク、気密性・水密性、安全性の点から、風除室への適用の可能性について報告があつた。六本木ヒルズの自動ドアでの人身事故を契機として、こうした扉の運動エネルギーが小さく安全な扉の普及が望まれる。

008は、各種のキッチン用加熱機器の機能性について比較実験したものである。現状コンロ5台と新型加熱機器

6台を対象にして、①加熱部と操作部の配置、②表示の誤認、③つまみの操作性などを評価した。本研究は、新型加熱機の改良点を明らかにするための研究であるが、キッチン用加熱機のユーザビリティを評価するためのガイドラインの作成など、研究成果をより汎用性のある成果としてまとめる方向も期待される。

009は、各種の収納形式をもつキッチンの機能性について比較実験したものである。扉収納式、ワゴン収納式、引き出し式の3種類のキッチンを対象にして、①感覚評価、②作業姿勢、③作業動作、④扉の開閉力、⑤筋活動量の点から評価した。結果として、ワゴン式キッチンの設計要件をまとめている。会場との議論の中で、「インテリア性という評価観点は如何なるものか」との質問があった。難しい問題であるが、このあたりの解答を体系的に整備することも本学会の大切な働きであろう。

010は、小原二郎氏らを中心として提案された寝具マットレスの「三層構造」の理論(1966)以降に出現した新しいクッション材(低反発ウレタンフォーム、3Dネット材料)について評価したものである。また、「三層構造」の他の製品への展開の可能性について論じている。寝具あるいは就寝環境についての研究は、残された課題が多い領域でもあるので、今後の展開に期待したい。

011は、地域高齢者コミュニティ施設の公的空間における身体支持具について、①設置状況、②利用状況、③利用者ニーズを把握した上で、床座空間と椅子座空間における実験用身体支持具を制作し、現場での使い方(姿勢・行為)の行動観察および評価をしたものである。

このように、調査に基づいて制作した試作品を現場に持ち込んで、実際の利用場面において実験・評価・改良を繰り返していく「実務プロジェクト型の研究」は、今後、急速にその重要性を増していくものと思われる。

(座長：渡辺秀俊)

□人間工学(2)

このセッションは、インテリア空間内で活動するロボットと人間の相互交流をテーマとした4題連続の研究発表であった。内容的に一連のものであるため、発表は連続して行ってもらい、質疑の時間をまとめて取ることとした。

012は、その1として、ロボットから受けるイメージが、交流前後でどう違うかをテーマとした研究、013は、その2として、ロボットが行う作業とそのロボットのデザインとの関係をテーマとした研究である。また、014は、ロボットと交錯しそうになったときの人間の回避行動特性をテーマとする研究、015は、人間がロボットとの間にとる対“人”距離をテーマとする研究である。

インテリア空間内へのロボットの導入は、SF小説やSF映画などでおなじみの本格的なヒューマノイドロボットということであればもちろん相当先の話になるが、掃除ロボットなどの単純な機能のロボットについては、以外とすぐなのかもしれない。研究テーマを最初に見たときには意表をつかれたが、そう考えれば、いまから始めてもちっともおかしくないテーマである。そのようなテーマをまず最初に発掘した、その発想の斬新さに敬意を

表したい。

研究内容についていえば、いずれもきわめてオーソドックスな人間工学研究と評価できるものである。そのためもあり、質疑は、研究の中味、たとえば研究方法などにはあまり向けられず、研究の前提として使ったロボットの一般性、あるいは現在すでに人間と一緒に暮らしているペットとの類似性、違いなどに集中した。そのような意見交換は、いわば思想的、哲学的なところにまで発展しそうな内容で、その意味では大変興味深いセッションになったのではないかと考える。司会の期待としては、この将来性のある脈脈をぜひ掘り進んでほしい。

(座長：直井英雄)

□計画(1)

016 平面計画の質を再評価する指標として回遊動線に着目し、過去に建てた工業化住宅約100件を検討して、その有効性を説いている研究である。回遊動線に組み込まれているL、D、K、玄関、廊下までは納めできるが、和室、子ども室などの私室まで含まれていることに疑問をもつ。回遊動線とは、言い換えれば通り抜けができる計画である。回遊動線になるためには必ず出入口が2ヶ所必要となる。複数の出入口は私室の室内計画に様々な面で影響を与えるため逆効果にならないかと考える。

017 今はやりのSOHOの仕事空間と生活空間の関係に関する研究である。家事や育児などが仕事への集中を途切れさせてしまう原因になっているという分析であるが、逆に仕事をしながら子どもの面倒がみられることを前提につくったのがSOHOである。住宅の中に仕事空間が存在する事自体に疑問を抱いている人が少なくなかったという結果が書かれていたが、SOHOという言葉自体が理解されていないのではないかと。SOHOは特別のものではなく、従来の事務所併用住宅や店舗併用住宅である。

018 ここ二、三年続けられている団欒に関する研究であるが、家族団欒のあり方を考える際に決め手となる家族周期についての配慮が薄いのが気になる。子どもの年齢で家族団欒の質が大きく左右されるため、対象としている家族像が明確に示されていないことがこの研究の魅力を半減させている。対象を18歳以上の家族全員としているが、調査項目では学校での出来事を親と話すや、遊園地に行く、進路の話をするなど小中学生のいる家族を感じさせる調査項目があり、違和感を覚える。対象とする家族周期や家族像などを絞り込んで研究計画をたてるのが、説得力を生む研究につながる。

019 広島県初のコーポラティブハウジングのコンセプトのキーワードを分析した研究である。結果的に、意図的に抽出してきたキーワード「装置」を見るか、使うかで、美的感覚派と生活創造派にうまく分けられており、つい説得されてしまう。あたり前の結果が得られているのだが、住戸のコンテンツからキーワードとしての住戸のハード、ソフトの詳細のとり方。がうまく、ライフスタイルの抽出の仕方に説得力がある。しかし、この結果が計画に対してどういう意味をもつのか、研究目的が理解しにくい研究でもある。

020 韓国のソウルにおける集合住宅のリフォームに

関する研究である。住宅状況が日本と異なるため様々な疑問をもった。半数以上が入居時に改造するということであるが、新築の集合住宅を購入しても半数がリフォームしてから入居するということなのか。改造原因は主に空間の狭小、及び平面計画と日常生活の不一致が中心であり、入居前後5年未満にリフォームが実施されている。老朽化ではなく個性指向による改造であり、集合住宅の供給側で解決しておくべき問題を多く抱えていることがわかる。

(座長：北浦かほる)

□計画(2)

021・022(伊藤・平田)は、「単身者のための介護居住空間に関する研究」の連続研究である。021では、“介護居住空間”に関する既往研究の研究対象と記述内容についての考察から、今後なされるべき研究視点として、住宅の運営や住宅における仕事室の質的向上、を挙げている。既往研究分析において、研究対象とする“介護居住空間”についての明確な定義が必要であると思われる。

022では、021の考察結果より、“住宅の運営”に着目し、居住者が築いてきた価値観を反映した生活のあり方と定義し、虚弱化した際の運営継続の仕方について、1事例から考察を行っている。事例は、当事者による詳細かつ長期間の記録に基づく貴重なものであるが、単身被介護者と介護者の関係が親子の場合に限定されている。運営継続の要望に関する両者の間柄の違いによる特徴等、より多くの事例に基づく今後の分析が期待される。

023(松房ほか)は、介護保険による住宅改修利用者とケアマネジャーを対象としたアンケート調査にもとづき、住宅改修の提案、内容決定及び改修情報の提供について、利用者、利用者家族及び関連職種の関与の実態を報告している。その結果、提案及び内容決定には利用者家族、利用者への情報提供にはケアマネジャーが大きく関わっている状況等が示された。現状では関与の低い建築系の職種との連携も含め、今後、より高い効果が得られる適切な改修がなされるために、利用者や関連職種への情報提供のあり方について、情報の質、伝達方法、時期等の多面的分析による情報システム構築へと研究が発展することを期待したい。

024(片山)は、小中学生を対象とした、「私の部屋」のモデルを制作する2つの実験調査から、小中学生のインテリア観と年齢による経年的変化について報告している。その結果、年齢が上がるにつれて、子供達が身近なものを手掛かりとして部分から次第に部屋全体の構成を考え、遠近的立体的空間把握が完成するようになることが示された。今回は年齢による変化を軸にした報告であるが、今後は、発達段階に加えて、発表者の既報告にもある男女差や、その間に経験した学習環境、住宅環境等、空間思考への影響要因も加味した、さらに詳しい分析が期待される。

025(北浦)は、個人が自宅で子供を預かる Family child care を行っているアメリカ住宅の保育空間について、平面図実測とインタビューに基づく、保育のために改修した空間とその使用実態に関する報告である。ライセンス

制度では子供の安全基準が重視され、保育空間はリビングと台所が主であること、教育プログラムの内容は保育者の価値観や考え方による差が顕著であると指摘している。アメリカ固有の社会制度による空間的特徴など、日米の相違を踏まえた上で、日本における3歳未満対象の“保育ママ(家庭福祉員)制度”による日本住宅での保育空間に対しての示唆、提案への展開を期待したい。

(座長：浅沼由紀)

□計画(3)

026 創造性を育むための学習の時・空間設計：脳の機能分化(右脳と左脳)をもとにデスクを作ることで、適切な環境になるとの仮説をもとに、オフィス用デスクの開発を試みた研究である。興味深い研究ではあるが、質疑でもあったように、脳の機能分化(右脳と左脳)と環境の間の関係付けが曖昧と感じられる。この点を十分検討して欲しい。また、提案しているデスクはオフィス用であるので、小学生による検証の後に、ぜひ一般ワーカーの意見もまとめて欲しい。

027 CAD/CAMによる車椅子のデザイン研究 その2：少ロット生産と軽量化を目的に、プラスチック段ボールを主材料として製作し、車椅子の製作上の妥当性を確認するとともに、使用に耐えられるかを検証した研究である。実際の製品化にはまだ多くの点からの検証が必要と思われるが、加工の良さを考えると非常に興味深い取り組みである。ただし、アルミ製の折りたたみ車椅子で12kg程度、軽量タイプになると10kgを切る製品もある。この点から考えると、まだまだ改良の余地がありそうだ。また、折りたたみができない点を考えると、本研究の提案する車椅子は、どのような状況で、誰が使用するのかを確認してみる必要があろう。

028 コンテナ型収納家具を用いたオフィス環境システムの提案：「琉政文書」と呼ばれる膨大な資料を整理・管理するために生まれたシステムをもとに、幅広く利用できる収納システムを構築・提案している。基本をA4サイズ対応のコンテナ型週の家具とし、連結器のを持ち、様々なレイアウトへの対応が可能としている。また、耐震試験も行い、地震への強さを確認している。ただし、ある程度の規模以上のオフィスでは、収納家具だけを動かすことは少なく、デスクやチェアその他も動かさねばならない。このため、専門業者が入ることが多い。今回の収納家具は報告内にもあるような SOHO 向けとして提案していくと良いと思われる。

029 キューブボックス型収納家具の定義と分類：生活空間の向上を目的とし、収納のシステム化と生活空間における収納状態の美しさを配慮した家具として、キューブボックス型収納家具を提案している研究である。発表内容は、収納に対する基本的な考え方の整理、構成部材数と連結方法から既存キューブボックス型収納家具の分類、キューブボックス型収納家具の問題点について述べている。030の発表と連題にはなっていないが、同一のテーマである。030にも共通する点として、キューブボックス型収納家具は大きさが固定されるとの特徴を持つ。システム化された数種類の大きさのキューブボックス型収

納家具を提案するなどが考えられるが、様々な大きさの収納物にどう対応していくかを十分検討する必要がある。

030 キューブボックス型収納家具の評価方法の検討：省スペース化に有効な収納家具として、キューブボックス型収納家具を提案している研究である。発表内容は、既存のキューブボックス型収納家具、キャビネット型収納家具、ラック型収納家具を、材質・価格・体積の点から比較し、それぞれの特徴をまとめるとともに、既存のキューブボックス型収納家具の評価項目の提案を行っている。029でも述べたように、様々な大きさの収納物への対応しやすさ等を評価項目に反映させる必要もあろう。

(座長：小山高専 白石光昭)

□色彩・照明

色彩・照明のセッションである。建築学と重なる部分も多いインテリア分野であるが、カラー・テクスチャ・照明（全体明るさ、照度分布、局部光環境など）といった分野は、インテリア分野で特にバイアスのかかる分野であると言える。この他にもまだまだあると思うが、「これはインテリア学会で特にやらねばならない」というような分野を特に支援したり、意識的にオーガナイズして研究発表を導出したり、といった努力が15年以上の歴史を持つインテリア学会としては、もっと必要なのではないか？

まずは「オーガナイズドセッション」の試行を前提にし、例えば「インテリア学会・研究分野懇談会」シリーズを積み重ねて、次回大会で試行する。少なくとも、そこに至る議論に参加した人は、最低1件は発表原稿を提出して、セッションの成立と盛り上げに一役買う、というのは如何であろうか？大会発表と論文集への投稿は学会の生命線であるので、そろそろ意識的な活性化策を取ることが、上記以外にも必要と思えてならない。大会講評を書くに当たり、一言提案させて戴きます。

さてこのセッションでは、5題の発表があった。031、032の照明に関するものと、033~035の色彩に関するものの2つに大別できるが、空間印象とか室内雰囲気という点ではインテリア特有の共通性を感じた。

031 「空間照明の相関色温度が色相弁別特性に与える影響」片山、青木は、白熱電球等の低相関色温度光源で暖色系が高彩度になり、好ましい室内雰囲気になる一方、色相弁別に困難を感じる問題点に対し、様々なケースについて弁別実験を行っている。実験方法や装置を試行しつつ、色々な試みをしている段階でもあり、あまり性急な結論を求めないほうが良いと思うが、大変興味深い研究であると思う。

032 「照明による好ましき評価への影響について」中島は、照明の変化により『空間印象』が変わることを、幾つかのシーンを設定して印象評価実験を行い、報告している。評価は11形容詞対を用い、因子分析によれば第3因子までで寄与率58%となると報告された。結論的なことは幾つかあるが、例えば「比較的低位置に明るさの重心がある場合、特に美しさと落ち着きの評価が高くな

り、好ましき評価が高まる」という結論の一つは、ヨーロッパ型の居間と日本の居間の照明の在り方（明るさ、照度分布、局部光環境など）に関する議論に、一つの資料を与えるものとも言える。今後の展開に期待したい。

033 「VRを用いた色彩による空間イメージへの影響」老田、ペリーは、仮想空間画像をスクリーンに投影する形の仮想環境で、擬似空間移動体験をさせつつ評価を行っている。用いたモデルも独特で、建築家ルイス・バラガンの「ギラルディ邸」を取り上げている。彼の建築は、面と面を直接ぶつけたようなディテールを持ち、実物と3Dの喰い違いが出にくいかも知れない。このトライアルをさらに整理して、系統化されることを期待したい。

034 「一般大学生における色彩に関する意識調査」小野は、生活環境・医療空間環境を意識しつつ、まずは生活において、どれくらい色彩を意識しているかを含め、生活環境全般の調査を報告している。調査項目中に『絵画の存在』を聞いている部分があるが、今後のまとめでは何の指標として見ているのか等、調査内容と回答の吟味が求められるであろう。いずれにせよ、「色彩のある生活」をどのような目的変数に関係付けるかなど、いわゆる「お調べ」に終わらない研究の位置づけを、今後深めて戴きたい。

035 「街の景観とCIカラーのイメージ—現代若者が心地よく感じる配色、不快に感じる配色とその傾向」中嶋、日原は、公共色彩研究の一環として、色彩への好みを調べる実験を報告している。色彩イメージをキーワードで現し、それを3色の配色表現に変換する。この実験は、既に2001年にも行っており、これとの比較も行っている。幾つかの興味ある指摘もあったが、全体に実験研究の内容が他者に分かり難く、もう少し研究のベースとなる部分を一般化して戴きたいと感じた。世代による色彩への一般的嗜好の違いを調べるのは、色々な点で方法的検討が重要となるので、この点も今後さらに分かりやすくして戴くと、他の研究者にも大いに参考になろう。

(座長：湯本長伯)

□計画（4）

036 「一対比較法によるイメージ印象評価」は、印象を意図通りのものに近づけるためにどのような改善をすれば良いか、評価法の第2の価値を求めている。そのために Non-Designer を対象にデザイン行為をさせずに無意識の印象判断を取り出すために、被験回数を十分にさせる一対比較法の導入を提案している。その評価法の新しい価値を求める真摯な姿勢は評価できる。が、提案された被験回数を十分させることと、印象を意図通りのものに近づけることとの関わりをもう少しわかりやすく明記して頂けると良いと思われた。会場からは、Non-People に評価させることについて質疑があった。

037 「空間の自己化とその表出に関する研究 その5 実態と言語との関係について」は、自己表出の実態としてのインテリア要素とその背景にある住み手の意識との関係を、1. 21の要素と言語との関係、2. 21の要素と意識との関係、3. 言語ユニットと意識との関係から具体的に述べている。興味深い研究であるが、“その5”と

いうこともあり、前提条件が提示されていないために論文を読む側にわかりづらいことが残念であった。会場からもその由と、まとめの“①インテリア行為に係わるヒエラルキーに応じて、実態の背景が異なる。”の結論に対して、21の要素自体のヒエラルキーとの関わりについて質疑があった。

- 038 「住宅のインテリア空間の生態学的研究 その1 空間の質に関する研究の枠組みと方法」
- 039 「住宅のインテリア空間の生態学的研究 その2 インテリア空間における質的因子の抽出」
- 040 「住宅のインテリア空間の生態学的研究 その3 インテリア空間への質的因子の適用と評価」

は、3編のシリーズである。生態学の立場から住空間のあり方を見直して、特にインテリア空間の質的な面から快適な住計画の立て方のヒントを求めることを目的としている。インテリア空間の質的因子を建築家の住宅作品の文献から得られたキーワードと、住宅設計者へのアンケートから得られたキーワードによって質的因子を抽出し、その実態の適応状況について検証を行っている。筆者らが言わんとすることは共感するところである。生態学的・インテリア第2世代・商品化住宅における営業設計段階への着目・「心の内」にあるインテリア空間など魅力的な言葉があり、賛同するところである。が、具体的にどう研究と係わってくるのかも知りたいところである。設計者が居住者の質的要望を得て住宅設計するのだから設計者の書いた文献やアンケートから質的因子を求めたと思うが、インテリア第2世代という居住者の変化に着目しているのなら、直接彼らからインテリア空間の質的因子を探り出すことも必要ではないかと思われた。会場からは、生態学的な要素と時間との関わり等について質疑があった。

(座長：平田圭子)

□計画(5)

041は、建築空間内部におけるヴォリュームの変化が感覚知覚に与える影響を模型実験により検証したものである。その結果、吹き抜け空間や滞留空間、流動空間などに与える影響を概ね定量化することができた。実験手法に工夫がみられ、関連研究における実験手法として参考になる。

042は、階段に着目し、バーチャル・リアリティを用いて画面上の仮想空間に階段を提示し、階段形状、空間内の配置位置などを変えた場合の進路方向の選択性に実験で明らかにした。その結果、進路選択には、空間規模、階段位置、階段幅などが影響することが明らかになった。階段使用の判断は、目的場所までの動線や諸室の配置が関わると考えられるため、今後はこれらの条件を加味した研究に期待をしたい。

043は、インテリア空間の正面、左右の仕上げ壁3面に施されたパターンが空間に及ぼす効果を台紙に張ったパターンを使用して明らかにしたものである。その結果パターンと評価の形容詞句との間に関連性を見出すことができた。調査で使用した提示パターンの縮尺や大きさが評価に影響すると考えられるため、これらの妥当性につ

いて確認を要すると思われる。

044は、床一面の色彩が容積感に与える影響を8畳の居間を想定し、縮尺模型による評価を行ったものである。その結果、床の色彩は、高さに影響しにくいなど、色彩と容積感などの関連性が明らかになった。対象とする被験や人数など、具体的な実験方法と今後の研究に対する方向性などの記載を希望する。

045は、床にピース敷きを施した場合の色彩が容積感に与える影響を前報と同様の条件で調べたものである。その結果、彩色面の面積を縮小した場合と色彩を組み合わせた場合において、明度が容積感に影響することが明らかになった。今後、室内の配置家具の条件など、更なる研究を期待する。

(座長：上野義雪)

□教育

046は、インテリア製図における表現手法の現状調査報告である。ここでは、建築製図の規格(JIS A0150「建築製図通則」)に表現手法が定められていないインテリアエレメント(家具、カーテン、カーペットなど)が、“実施設計図面”にどう表示されているか各種調査を行った。

その結果、インテリア製図に関し基準が必要とする企業55%に対し、基準を持たない企業が53%だった。描線や文字サイズでは、社内基準を設けず担当者が各自設定するケースが多く、インテリアエレメントでは特に“自由曲線物”が表現しづらい様で、収集した描写事例からもその苦勞が伺われる。047は発表者が欠席。048は、インテリア分野におけるCADの教育方法と資格の現状を踏まえた、認定制度に対する提案である。情報化社会の今日、インテリア分野でもCADによる図面作成が一般化してきたが、その教育方法についてはコンテンツが先かスキルが先かの議論があり、前者は4年制大学で、後者は2年制の教育機関で採られる場合が多い。資格については、建築部門・機械部門の試験は行われているがインテリアに特化した試験はない。近年、インテリアに関する資格であるインテリアコーディネーターおよびインテリアプランナーの受験資格の年齢制限が撤廃、もしくは若年齢化された。これらに対応すべく、2年間でCADスキルを習得しつつインテリア基礎も学習するためのインテリアCAD認定制度を、インテリアCAD研究会が主体となって開発し、2003年度にスタートさせた。

(座長：木村戦太郎)

□設計・デザイン

049はタペストリーによる、空間の仕切りの実例集である。日本空間で古来より「しつらい」に使用されてきた御簾、屏風や衝立が持っていた機能や特性を現代の室内空間に合わせてデザイン・制作されている。左右に移動するもの、2枚重ねて「透ける」を強調したものなどが提示された。ファブリックの風合いは表情豊かであり、装飾性にも富み空間に安らぎを与えるが現実問題として、埃を呼びやすく、メンテナンスに苦勞がある。

050は130㎡程度のマンションのリフォームの実例である。子供の成長、独立に合わせて新しい気分でこれからの

生活を始めたいという施主の希望に合わせた提案である。個室化されていた和室をリビングの一部に組み込み、座敷と広縁という伝統的な場の考え方をテーマとしている。また、和室に30cmの段差を付けることで、床下収納庫と引き出しを設置した。さらに段差を上がり下がりすることで運動機能を期待しているが、30cmを下りるのは少し、負担ではないかとの意見も出された。また、以前にはあった納戸をなくしたことでこれからの生活の中での対応にやや不便、使いにくさが生じないか。リビングを広げたことで、南側の光がより多く取り込めるようになったと同時に、キッチンの壁をガラスに変えたことで、全体的に開放感が得られている。

051は議論と共同作業に対応する、新しいワークスペースへの提案である。「形式的」「一方通行」のイメージを払拭し、オフィス空間をよりよいコミュニケーションと創造の場にするための打ち合わせ家具・什器が提示された。内容は有機的フォルムを持つ3タイプのテーブルと背面から投影出来るクリアスクリーン、2タイプのワゴン、数種のボードからなる。とくに緩やかなアウトラインのテーブルは参加者をリラックスさせ、互いに親近感を持ち易くする効果が期待出来る。テーブルの中央にはホワイトボードが取り付けられ、自由に書き込みながらの作業とプレゼンテーションが可能となろう。現在は既製品の脚部で間に合わせているが、これから改善してゆくとのことである。今秋には製品化される。

052は「四ッ屋公園 Project」と題された、岐阜、長良川の河川敷を借りた地域の活性化への提案である。岐阜の街へのへの的な位置に小さな公園を設置する。ここは旧堤防の名残がある場所で、ここに「人を呼び街に賑わいを取り戻す」とのコンセプトで、ウォーキングの拠点としての小スペースが提案されている。平面計画の概略図だけの報告であったために、具体的な提案内容が読みとれなかった。周辺の環境が分かるような現場の写真や、計画のディテールの説明が欲しかったように思う。

(座長：見城美子)

■日本インテリア学会第17回大会のお知らせ

大会実行委員長 岡島達雄（琉球大学）

日本インテリア学会第17回大会は、沖縄の琉球大学で、開催します。

10月21日（金）午後 理事会、夕刻 懇親会

10月22日（土）研究発表会、講演会、卒業作品展

10月23日（日）自由見学会

沖縄は、日本本土のはるか南西に位置しますが、時間的には遠くありません。碧い海と珊瑚礁、世界遺産、戦跡、音楽、舞踊、料理、工芸などにも富んでいます。また米軍基地の75パーセントがあります。亜熱帯島嶼環境とともに、沖縄文化もお楽しみ下さい。

研究発表会の形式は、これまでと変わりませんが、申

し込み方法などにはご注意ください。講演会は、沖縄文化にちなんだものにしたと考えています。大きく変更されるのは、卒業作品展です。応募方法が相当変わる可能性がありますので、募集要項にとくにご注意ください。

大会開催期間は、晴天の多い時期です。水着ご持参でお越し下さい。昨年は、大手航空会社の特割期間でもありました。天候にも飛行機にも恵まれますことを祈っております。

10月には、ご家族ご友人もお誘いの上、大会に懇親会にご参加いただけることを願っています。

■平成16年度第3回理事会議事録

総務委員長 上野義雪（千葉工業大学）

日 時：平成16年10月16日（土）12：00～12：50

会 場：文化女子大学 C041国際会議室

出席者：高橋 島崎 岡島 加藤 内藤 小宮 西出
小原（誠） 沢田 北浦 森保 木村 栗山
棒田（小松代） 日原 灰山 清水 直井
湯本 松本（吉） 松本（直） 渡辺 藤城
上野 松崎（宮本）

進行役：上野

記 録：松崎 上野（宮本）

配付資料：1. H16年度第3回理事会議事資料（上野）
2. H16年度第2回理事会議事録（上野）
3. H16年度総会議事録（上野）
4. 総務委員会会議の設置について（上野）
5. H17年度役員改選スケジュール・内容（上野）

議 事：

上野総務委員長の進行により、平成16年度第3回理事会の議事を進めることにした。

1. 総会・前回理事会議事録の確認
 - ・承認された。
2. AIDIA 東京大会の件
 - ・加藤実行委員長から開催終了の報告がなされた。
 - ・大会の会計は赤字になる可能性がある。
 - ・今後、再度日本大会開催が予定されている。
 - ・AIDIA 会長は高橋 JASIS 会長が就任、代行を岡島副会長に依頼する。
3. 事務局移転の件
 - ・AIDIA 大会終了後、残務整理の目途にあわせて、JASIS 事務局を東京大学に移転する。
4. 役員補充の件
 - ・白石光昭氏を理事に推挙、総務副委員長に就任。白石氏の広報委員の後任については今後検討する。
5. 組織の見直し
 - ・総務委員会会議を設置し、学会運営について定期的に検討する。会長、副会長、総務委員会委員、事務局長で構成、必要に応じてオブザーバーの出席を要請する。会長補佐会議との区別を明確に。副会長の

中から総務担当者を決める。

6. 次年度大会の開催地について

- 平成17年10月22日（土）、琉球大学において開催。大会長は岡島理事。梗概原稿の募集などの作業を総務委員会や事務局でサポートする。

7. 役員改選の件

- 本年12月中に支部別の評議員選挙を実施。1月中に理事選挙、日程の詳細は配付資料の通り。

8. 会員名簿の発行の件

- 今年度中に仮の名簿を発行。住所・所属等の修正は既に会員に依頼済み。メールアドレスは、次回の名簿発行時に掲載するが、役員については掲載の可能性を検討する。

9. 高橋会著の挨拶

- AIDIA 東京大会は、会員へのPR不足のためか参加者が少なかった。学会パンフレットの内容を分かりやすくするなど、学会運営の在り方を真剣に考えなければならぬ。体調が戻るまで、会長代理の任を岡島先生にお願いしたい。

(宛先：会報 hhwatanabe@jcom.home.ne.jp、
年報 shiraish@oyama-ct.ac.jp)

2) ホームページ

連絡用・事務用のデータを収納した事務ホームページを開設致しております。

AIDIA 日本大会実施でも、メイリングリストとホームページが活躍しましたが、主に連絡や会合情報等の周知に、ご活用下さい。

インテリア学会・事務ホームページ URL

<http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/index.html>

上記のミラーサイトです。同じ内容が入っております。

<http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~yumoto/JASIS/index.html>

ご意見を戴ける場合は、編集委員会の湯本／九州大学までお願い致します。

(宛先：yumoto@design.kyushu-u.ac.jp、アドレス変更しています)

3) 工事標準仕様書・試作版の件

なお現在HPには、構法・計画委員会のマネジメントによる「工事標準仕様書」の試作版が、公示されております。近く最終版が上梓される予定で内容は変わりますが、ご意見とご関心をお寄せ下さい。

<http://www.kyushu-id.ac.jp/~ymtlab/JASIS/kinde x.html>

ご意見を戴ける場合は、委員会の小原主査／文化女子大学までお願い致します。

4) 問合せ

広報公聴を担当する広報委員会が、戴いた問合せを整理して各担当に連絡致します。前回にもお知らせした連絡事務所に、何なりとご連絡下さい。

電話：03-5953-8575

(インテリア学会と告げて下さい)

FAX：03-5841-8515

(東京大学建築学専攻内、FAXのみです)

(ご連絡には、差出記名と宛名を忘れずをお願い致します)

5) その他

学会内の情報をオープンにして行くための手段としては、やはりメールニュースが最も有効です。

多くの学会では今、「受付窓口の集約代行化」と「メールニュース」開設が行われつつあります。「メールニュース」を受け取れない方のためには、FAXによる代替手段が取られており、ニュース発生から数日間での情報共有が可能となっています。そこで来るべきニュース開設の準備のため、機会を見つけて事務局まで「メールアドレス、またはそれに代わるFAX番号」を、お知らせ下さい。宜しくお願い申し上げます。(既に、お知らせ載っている方は不要です)

連絡先：事務局 FAX 03-5841-8515

■運営委員会だより

□総務委員会

委員長 上野義雪 (千葉工業大学)

平成16年12月末から学会事務局が東京大学西出研究室に移転した。昨年は、AIDIA 東京大会の事務局を東京大学西出研究室に担当して頂いたこともあり、事務局の移転が当初の計画から大幅に遅れることとなった。これまで事務局長を引き受けていただいた藤城幹夫先生には、心から感謝と御礼を申し上げます。事務局移転に伴い、しばらくの間は、会員の皆様方にご不便をおかけいたしますが、軌道に乗るまでご理解とご協力をお願いいたします。

□広報委員会

委員長 湯本長伯 (九州大学)

広報委員会は、学会の広報及び公聴機能を分掌しております。

1) 会報

今号は大会号となりますが、年度末から総会前に年報を発行予定です。

30号から大会発表の座長報告を掲載していますが、大会関係の座長報告は、学会活動にとっても大切なものですから、座長の先生方のご協力に感謝すると共に、会員の皆様におかれても、色々のご意見をお寄せ戴き、より良い形式や内容に近づけて行きたいと思っております。宜しくお願い申し上げます。

ご意見を戴ける場合は、編集委員会の渡邊あるいは白石までお願い致します

□論文審査委員会

委員長 直井英雄（東京理科大学）

現在、第15号の論文集の論文審査が進行中です。論文数が少な目なのが残念ですが、期日通りの発行を目指して努力しております。

論文集の担当者として常々思っているのは、どうしたら論文応募が盛んになるかということです。現実を踏まえて考えれば、もちろんこの問題も、かける労力と得られる利益との関係だということで、次のようなアイデアを考えてみたのですが、いかがでしょうか。別に、画期的なアイデアというわけではありません。きわめて現実的なアイデアです。

主に、大学等にお勤めで、大学院生を指導されている先生たちへのお願いということになります。大学院生たちの尻をたたいて、連名で応募させるのです。先生方にとっては何より労力が相当削減されるはずですし、先生ご自身の利益にはそれほどならないかもしれませんが、学生にとっては、相当な実績になるはず。二人分合わせれば、労少なくして益多しというわけです。実際、本学会や他学会に口頭発表だけして、放ってある研究成果がずいぶんあるのではないのでしょうか。その有効利用を考えてもよいのではないかと思うのです。もちろん可能であれば、1編に限らず、2編でも、3編でも。どうか、ご検討ください。

■支部だより

□東北支部

前支部長 日原もとこ（東北芸術工科大学）

1) インテリア学会東北支部大会

＜大会スケジュール＞

- ・学内見学 11:00- (30分程度)
- ・総会 11:00-12:00 (開場 10:45) 3階 304教室
- ・支部研究発表大会 13:00-14:30 (開場 12:45) 4階 412教室
- ・特別講演会参加 15:00-17:00 会場:パレスグランドール
主 催:インテリア産業協会、山形 IC クラブ
協 力:日本インテリア学会東北支部
テ ー マ:「世界の子ども部屋から」
講 師:北浦かほる氏
- ・パネルディスカッション 17:00-19:00
会場:同上
パネラー:北浦かほる、荒井智子、阿部由美子
コーディネーター:日原もとこ
- ・懇親会 19:00-21:00 会場:同上

2) 総会報告

会員の時間調整が噛み合わず、約1年間にわたる間

において、昨年11月に総会と研究発表、講演会を一举に執り行うことになった。総会では、活動報告に引き続き、1年遅れで、日原支部長の任期満了に伴い、新たに、若井正一支部長が選出された。

新年度からは若井支部長新体制の下で活動を発足させることとなり、議事は滞りなく運び、議案全ては承認された。

3) 17、18年度新役員

支 部 長:若井正一 (日本大学)

副支部長:鈴木敏彦 (東北芸工大)

評 議 員:若井正一、鈴木敏彦、牧田和久

早野由美恵、日原もとこ

4) 平成16年度インテリア学会東北支部 研究発表大会

日時 平成16年11月27日

場所 東北芸術工科大学

1. 開会挨拶 13:00-13:05

2. 研究発表

＜学生部門＞ 13:05-13:45 (発表6分、質疑2分)

座長 山口 光

- ・コンピュータ表示画像を利用した色彩の面積効果に関する一実験;○伊藤 隆 (日本大学大学院)、若井正一 (日本大学教授・工博)
- ・限定通路における歩行者の行動特性と通路幅に関する検討;○十文字 聡 (日本大学大学院)、若井正一 (日本大学教授・工博)
- ・対面型カウンターの機能寸法に関する人間工学的検討;○時崎 裕千 (日本大学大学院)、若井正一 (日本大学教授・工博)
- ・木造住宅の施工者の立場からみたリフォーム実態に関する検討;○西山 博之 (日本大学大学院)、若井正一 (日本大学教授・工博)
- ・室内構成要素としての窓まわりの使用実態と開口尺度に関する一考察;○濱田 育実 (日本大学大学院)、若井正一 (日本大学教授・工博)

＜一般部門＞ 13:52-14:25 (発表9分、質疑2分)

座長 市岡 綾子

- ・情操教育に視点をのこした児童向け英語教材の開発;○藤原 智代 (東北芸工大修了生)、日原もとこ (東北芸工大教授)
- ・CI カラーにみる若者の色彩イメージ若者が心地よく感じる配色、不快に感じる配色とその傾向-;○中嶋 健治 (ピー・ソフトハウス)、日原もとこ (東北芸工大)
- ・CAD/CAM による車椅子のデザイン研究-プラスチックダンボールによる車椅子の研究事例;○山口 光 (東北芸術工科大学)

3. 閉会挨拶 14:25-14:30

後記:山形 IC クラブ主催の特別講演会が開催されるのを機に、本支部も相乗りして急遽、支部大会開催日が決まったのであるが、内容は実に盛り沢山で、そのパワーの源は日大工学部の院生達の参加にある。

彼等は早朝、郡山を発ち、当大専用バスで30人も大挙して山形に乗込んだ。研究発表の大半は彼等によるもので、その熱心な質疑応答には眼を見張るものがあった。これを是非、支部大会の在り方として今後とも定着したいものである。

□関東支部

支部長 小原誠（文化女子大学）

1) 第三回 AIDIA 開催支援の取りまとめ

本年10月15日開催の第三回 AIDIA の開催にあたり、AIDIA 実行委員会からの要請で関東支部においても作業を分担し、行事は無事終了致しました。ここに、ゲストのためのホテル予約関係の川島、長谷川両氏、懇親会設営の河村、見城、小林の三氏、開催日の設営・進行・影像撮影の岡田、田辺両氏に心から謝意を表します。

この行事については、当初より赤字が予想されており、10月の大会時の評議員会などで支部・研究会の余剰金の拠出を求められていましたので、分担作業時の立替え金を含めて40万円を AIDIA 実行資金に繰入れましたことを支部各位にご報告申し上げます。

関東支部役員選挙について

3年ごとの JASIS 役員選挙の時期となり、選挙管理委員を、古賀紀江、丸茂みゆき、村口峯子の3氏にお願いし、委員長を村口峯子氏に指名させて頂きました。2月25日の開票の結果、関東支部選出評議員には39氏が当選されました。また関東支部役員には、稲田深智子、見城美子、上野義雪、小林輝暉、岡田悟、谷口久美子、奥田宗幸、長山洋子、川島平七郎、長谷川隆之、河村容治、山田智稔の12氏が当選されました。3月末には新旧役員の顔合わせと交替の幹事会を開催の予定です。

2) 今後の見学行事

今年は AIDIA 開催のため関東支部の行事が少ない年になり、申し訳なく思います。しかし年度末には、懸案の見学会を開催する予定です。候補としては、各種のプラスチック成型法の見られる日立化成の結城工場、真壁町の伝統建築群、増子の陶芸研修施設など、これらは比較的近いので、組合わせて企画したいと思えます。決定すれば月末にはお知らせすることになりましょう。

□東海支部

支部長 松本直司（名古屋工業大学）

平成16年度支部事業及び支部創立15周年事業を実施しましたのでご報告を致します。

1) 平成16年度支部事業

- ・支部総会：平成16年5月29日（土）於）名古屋造形芸術大学
- ・支部役員会：①平成16年5月29日（土）於）名古屋

造形芸術大学、②平成16年8月11日（水）於）名古屋工業大学、③平成16年10月1日（金）於）名古屋工業大学、④平成17年3月29日（火）半田市で開催予定

- ・見学会：①「如庵と犬山城」平成16年5月29日（土）、参加者26名、②「半田 蔵の街」平成17年3月29日（火）開催予定
- ・懇親会：平成16年5月29日（土）、於）なり多（旧奥村邸）参加者18名
- ・後援：講演会「健康で安心な住まい～住まいの材料とのかかわり～」、主催 名古屋住環境研究会、平成16年11月13日（土）、於）東桜会館

2) 支部創立15周年記念事業

平成17年1月22日（土）於）日本料理「稲本」とその周辺

- ①講演会「遊蕩の空間—中村遊廓の数寄とモダン」講師：名工大教授 若山 滋、参加者：45人
- ②見学会 日本料理「稲本」とその周辺、参加者：45人
- ③記念パーティ 於）日本料理「稲本」参加者：30人

□関西支部

支部長 北浦かほる（帝塚山大学）

1) 国立国際美術館と graf ビルディングの見学会

11月3日の移転オープンに先駆けて、10月8日に話題の美術館の特別見学会を開催しました。この国立国際美術館は千里の万博会場にあったものを中之島に移転させたもので、シーザーペリ設計の完全地下型美術館として注目されています。当日はあいにくの雨天にもかかわらず、参加者は会員外も含めて28名と盛況でした。

館長とシーザーペリ事務所の担当者から、美術館の特徴や建築概要の説明、地上部の特徴的なモニュメントのイメージや、建築自体が水中に浮かせた構成になっていることなどの興味深い説明をうけました。その後、開館準備真っ最中で、ほぼインテリアの整った内部を見学しながら、直接設計者に、様々な質問に対応していただくことができました。

もう一つの graf. bld. はデザイナーグループ graf. の拠点で、美術館に直ぐ近い中之島にあります。衣食住のすべてをデザインするという思想や、ミッドセンチュリーを思わせるデザインが、若者から大変な人気を得ているということです。今回はオフィス、ショールームはもとより、カフェから家具工房まで案内していただきました。古く狭い小さなビルが、若者のセンスでみごとに今風に活用されていました。

2) 関西支部評議員選挙結果と新旧合同評議員会

本部からの指示により、評議員選挙を11月29日～12月10日の期間に、郵送・無記名で実施しました。選出数12名ということで得票順に以下の12名が選出されました。北浦、加藤、小宮、片山、ペリー、石橋、郷力、

大江、宮後、館野、中山、増田。

2月26日（土）午後新旧合同評議員会を実施します。

審議事項は関西支部役員及び支部活動内容・支部会員の把握などについての予定です。

□中四国支部

支部長 灰山彰好（広島女学院大学）

本年度の支部活動は以下の3テーマ、いずれも中国インテリアプランナー協会との共催にて、学生と一般の参加を得て盛会であった。あとは新学会員の獲得が課題である。

- ・ 5. 29 講演会『内へのインテリア』広島工業大学教授・黒岩俊介氏 報告済み
- ・ 11. 19 第4回ミニレクチャー「これからの店舗デザインのテーマ」、講師：(株)カーサ商業建築研究所・山本胖氏、広島市まちづくり市民交流プラザ
- ・ 12. 4 晩秋の厳島・古民家再生見学会、案内人：建築家、ガラス絵作家・インスタレーション作家 福島俊を氏、宮島町
- ・ 失敗 支部役員、評議員選挙を失念、遅ればせながら 2.15現在、選挙中です。

本年度より某大学に間借りをして、支部HPをアップしています。何しろ多忙にていつもアップアップ、速報性は乏しいですが、支部の雰囲気はお伝えできると思いますので、よろしかったらお訪ねください（ヤフーで「日本インテリア学会中国・四国支部」と入力してください）。

■研究部会だより

□歴史部会－〈幹事会〉〈見学会〉のご報告

部会長：内藤 昌（愛知産業大学）

代表幹事：河田克博（名古屋工業大学）

1) 幹事会

平成16年10月16日（土）の大会開催日の昼休みに、幹事会を開催。出席者6名。特に、次年度以降の事業計画（見学会・講演会）や研究活動について検討した。

2) 見学会

同年10月17日（日）10：00～15：00に、「東京の近代建築－旧岩崎邸＋朝倉彫塑館」と題して、当該建築を見学した。参加者12名。質の高い近代住宅の豊かな空間デザインを目の当たりにし、韓国からの研究者参加もあって意見交換し、一同新たな感動とデザイン意識を抱いた見学会であった。

□教育部会

部会長 北浦かほる（帝塚山大学）

1) 卒業作品展のまとめの小冊子の発行

「日本インテリア学会卒業作品展10年のあゆみ」

平成16年で卒業作品展が第11回目を迎えるのを記念して、教育部会では過去10年間の記録をまとめることにしました。教育部会の予算内で作ったので発行部数は500部が精一杯でしたが、見城・高月両幹事の熱心なご助力で立派にまとめていただきました。卒業作品展はインテリア学会の人材育成を支える重要な事業であり、さらに継続・発展させるために、今後とも学会の多大な援助とご協力を期待するものです。

2) 教育部会シンポジウム

「わが校のインテリア教育の特徴」

教育部会ではこれからのインテリア教育のあり方について従来から、人材を求める企業側からの問題提起やインターンシップの実践報告などの研究会を開催してきました。本年度は多くの方々に参加していただけるように、大会時にシンポジウムを開催しました。上記のテーマで、3つの教育現場から問題提起をしていただきました。具体的には各校のインテリア教育の特徴を①社会的な人材育成像 ②そのための重点的カリキュラムの2点に絞って発表していただき、インテリア教育の抱えている現状の課題についてともに考え、討議しました。発表していただいたのは以下の方々です。司会は田辺・植松幹事。

「消費される教育から活用される教育へ」

一 共立女子短期大学生活科学科教授 岡田悟氏

「文化女子大のインテリア教育」

一 文化女子大学造形学部住環境学科教授 木村戦太郎氏

「高校のインテリア教育の実状と問題点」

一 都立工芸高等学校インテリア科教諭 高柳勝彦氏

専門的人材育成以前に学生の興味をいかに引き出すかという短大での問題、社会の変化による職業高校から専門高校への変容による高校での問題など、インテリア教育は社会的に幅広い層で、様々なレベルでの教育が求められていました。そのため建築教育よりもより複雑に分化した、要求段階に対応した教育が現場の努力で工夫されていることが明らかになりました。また、抱えている問題も大きく深刻でした。今後、これらの複雑な問題をまず整理していく必要があると考えています。

3) 卒業生の就職先に関するアンケート調査

インテリア教育の社会的要請を、また別の角度からとらえようとしている企画です。企業側の採用実態と、卒業生の就職先の分野を調査する計画で、昨年からは部会時に調査対象や調査方法など、企画・検討を重ねてきました。準備がほぼ整いましたので、18年度には調査を実施します。その際には是非ご協力お願いいたします。

□CAD 部会—インテリア CAD に関する研究の進展

部会長 川島平七郎（東横学園短期大学）

CAD 部会は、2つのワーキングに分かれて、「製図法 WG（主査：奥田宗幸）」ではインテリア計画に適した製図法の標準化について、「表現 WG（主査：岡田悟）」ではインテリアの CAD 表現について研究を進めている。昨秋の第16回大会（2004年10月）では、各 WG からそれぞれ論文発表したの、要点を紹介する（詳細は梗概集を参照されたい）。

「インテリア製図における表現手法の現状」（発表者：岡本一紀、奥田宗幸）は、製図法 WG における研究活動の成果を報告した。インテリア図面は、インテリアに関連が深い建築製図の規格（JIS A 0150「建築製図通則」）に従って表現されることが多いが、本調査の主目的は、その製図通則に定められていないインテリア製図独特の表現手法、インテリアエレメント（家具、カーテン、カーペット等）の表示の実態などを把握することである。調査結果から、インテリア製図の規格について、線の太さの設定と種類、文字の大きさの設定、平面図におけるインテリアエレメント表現等について報告した。

「インテリア分野における CAD 資格・認定制度の開発について」（発表者：岡田悟）は、CAD 部会幹事会（第7回：2004年7月31日）に発表者より梗概草稿が提出され、ここでの討論を踏まえてまとめられたものである。発表内容は、発表者も参加する「インテリア CAD 研究会（代表：長谷川隆之）」が大学・短大・専門学校における CAD 教育の表現方法・レベル等を調査し、教育目標としての CAD 資格・認定制度の在り方を検討した経過の報告である。教育の方法や資格取得時期等の観点から考察し、新たなインテリア表現に適した制度を開発する必要性を述べている。

また、CAD 部会と関東支部・教育部会の共催で3回連

続の「研究会」を実施中である。最新の3次元 CAD ソフトの機能検証を目的とし、第1回「3D インテリアデザイナーPRO」、第2回「SketchUP」に続き、第3回は以下の内容なので、会員諸兄もご参加いただきたい。

第3回「インテリア CAD に関する研究会」

日 時：2005年3月5日（土）14時～17時

場 所：東京工科専門学校（JR 東中野駅前）

テーマ：“本格的3D・CG ソフトで家具デザインに適切な [Shade 7.5] の機能検証

指 導：CAD 研究家の河村容治氏（本学会 CAD 部会会員）

実際に画面を操作して家具のモデリングを体験する企画で、CAD 初心者も参加できる。理解しづらい3Dの座標表示「ベジェ曲線」、「自由曲線」等について基本を練習する。

申込先：FAX で03—3953—5051（長谷川）・先着順30名

■事務局の移転について

総務委員会 委員長 上野義雪（千葉工業大学）

昨年12月末に学会事務局を東京大学に移転いたしました。しばらくの間は、皆様方にご迷惑をおかけいたしますが、よろしくご協力のほどをお願い申し上げます。

新事務局：

〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学・大学院工学系研究科・建築学専攻
西出研究室気付
日本インテリア学会事務局
TEL. 03-5841-6168 FAX. 03-5841-8515

■事務局より

新事務局長 西出和彦（東京大学）

この度、事務局は、東京大学・大学院工学系研究科・建築学専攻・西出和彦研究室へ移転しました。会員の皆様にはよろしくお願い申し上げます。また前事務局長・藤城幹夫先生に対しましては、長年のご苦勞に感謝申し上げます。

何分にも大学研究室気付の事務局ですので、私どもは日常的には研究室の教育研究業務を行っている点をお含みおき下さるようお願いいたします。例えば電話番号も研究室のものです。かかってきた電話には通常、「西出研究室です」と言って、インテリア学会とは関係のない教職員が出るようになります。そのような点、ご理解下さい。

従いまして、連絡は原則としてファックスかEメール

でいただきますようお願い申し上げます。

住所、電話番号、Eメールアドレス、銀行口座、郵便振替口座は以下の通りです（銀行口座と郵便振替口座はAIDIA 東京大会事務局として使用していたものと同一です）。

■訃報

正会員の井村五郎（千葉工業大学工学部デザイン科学科・教授）先生は、昨年12月13日、病氣療養中のところ急逝されました。学会では選挙管理委員長や大会の座長をお願いしておりました。

新事務局住所：

113-8656 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学・大学院工学系研究科・建築学専攻・西出和彦研究室
Tel. 03-5841-6168/Fax. 03-5841-8515
tnishide@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

銀行口座：

みずほ銀行・根津駅前支店・普通預金口座：1793780 日本インテリア学会事務局

郵便振替口座：

00130-1-667613 日本インテリア学会

■編集後記

本年度2回目の発行になる33号です。編集者（私）の
不手際により、発行が大幅に遅くなってしまいましたこと
をお詫び申し上げます。当初は2月中旬発行を予定し
ていたため、記事の内容に時期的なズレが生じてしまっ
た部分もあります。会員の皆様ならびに早々にご寄稿い
ただいた執筆者の皆様には、紙面をお借りして深謝申し
上げます。

会報22号からは、それまで年1回の発行周期を、5月
の総会后、11月の大会后、年度末（年報）の年3回の発
行に増やすことを目標に編集してきました。気がつけば、
平成16年度ももう終わりですが、次号は、強引に年度を
しめくくる年報の発行を予定しています。引き続き、会
員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

これもまた広報委員会の不徳のいたすところですが、
HPの整備が遅れている本学会においては、今のところ会
報は、会員の皆様が情報交換をする重要なメディアかと思
います。連絡掲示板としての役割を越えて、双方向の
コミュニケーションの媒体となるよう、広報委員会とし
ても改善・工夫・努力をする所存です。とはいえ、編集
の専門家ではない我々ですので、是非とも皆様のご教示
を賜れば幸いです。

学会の役割の一つに、社会にコミットすることがある

と思います。会報も、会員同志のコミュニケーション誌
から、さらには社会へのメッセージ・提言・行動に結び
つく元気なメディアに変容していく必要があるかと思
います。つきましては、会報に関するご意見、ご寄稿など
ございましたら、広報委員会の会報編集担当
(watanabe@bunka.ac.jp)までお寄せいただければ幸い
です。願わくば、一緒に活動して下さる方の一声をお待
ちしています。

(渡辺秀俊)

■事務局

日本インテリア学会事務局
事務局長 西出 和彦
〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学・大学院工学系研究科・建築学専攻
・西出和彦研究室
TEL：03-5841-6168/FAX：03-5841-8515
tnishide@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

■日本インテリア学会会報第33号（2005.3.22発行）

編 集 者：湯本長伯、渡辺秀俊
発 行 者：高橋鷹志（日本インテリア学会会長）
広報委員会：湯本長伯、小林輝暉、藤城幹夫、
白石光昭、渡辺秀俊

